

‘はかる’ 科学の存在意義



上 本 道 久

自然科学の多くの分野では実験的な計測値に基づいて考察する。従って、そのはかる方法をデザインして確立し、はかった値の信頼性を検証する‘はかる’科学の存在が不可欠である。

今春より機関誌「ぶんせき」の編集委員長を拝命していますが、思えば永い間、研究以外にも様々な学会活動や産業界での分析法標準化に関与してきました。分析化学は化学計測の意義を合理的に説明する体系として、基礎・応用化学にとどまらず多方面の科学技術に影響を及ぼす分野と思いますが、その一方で、分析化学は次第に自然科学の傍流とみなされつつある気がしてなりません。大学では分析化学と名の付いた研究室が減少傾向となり、公的な研究所では分析部門は研究開発の支援分野に属し、企業では生産活動に伴う品質管理部署という認識が主流となってきました。新しい研究に伴う分析需要はむしろ高まっているものの、新鋭装置が導入されればすぐに良好な分析値が出せるとされる傾向にあり、端的には、分析技術は必要だが深い専門家までは不要という論調が優位になってきたのかもしれませんが。若者の分析化学のキャリアパスが描きにくくなってきたと案じるのは杞憂にすぎないでしょうか。

何故こうなってしまったのかは根本から多角的に検討すべきですが、我々は‘はかる’科学を維持発展させるために、まずはその意義と効能を広く発信し続ける責務があると思います。「ぶんせき」誌は学会機関誌として、学会の活動情報以外に多くの解説や総説、トピックスなどを世に送り出してきましたが、これからはその発信対象分野を更に広げていくことも必要でしょう。学会ホームページでは「ぶんせき」最新号のいくつかの記事のフリーアクセスサービスを行っていますが、毎号かなりのアクセスがあることから興味をうかがえます。分析の仕方や分析値の正しい解釈を求めている人が多いことを物語ると思います。

計測の知的基盤は国力に直結します。研究機関はもとより行政やものづくり現場、市民生活においても、分析化学の知見やはかる基礎知識は必要です。「ぶんせき」誌がそのためのリーディングジャーナルとして更に貢献していけるよう、微力ながら委員と共に活動していきたいと思っています。

〔Michihisa UEMOTO, 明星大学理工学部, 「ぶんせき」編集委員長〕